

書評

ジョルジョ・アガンベン著『言語の秘蹟：宣誓の考古学』
——政治権力と言語の親密な関係

Giorgio Agamben. (2009). *Il sacramento del linguaggio. Archeologia del giuramento: Homo sacer II, 3.*, 2 ed., Laterza, Roma-Bari (1 ed., 2008).

倉科 岳志*

Takeshi Kurashina

いまはまことに醜いが昔はそれだけ美しかった、
それが創造主に対して昂然と叛いたのだ、
いっさいの災いが彼に淵源を発するのも当然の道理だ。
ダンテ（平川祐弘訳）『神曲 地獄編』

『言語の秘蹟：宣誓の考古学—ホモサケルⅡ-3』は「ホモサケル」と題された政治哲学に関するアガンベンによる一連の研究の最新刊にあたる。これら諸著作のマニフェスト的なものとして『到来する共同体』（1990年）を刊行後、アガンベンはこれまで『ホモサケル：主権権力と剥き出しの生』（1995年）、『アウシュビッツの残り物：アルシーブと証人—ホモサケルⅢ』（1998年）、『例外状態—ホモサケルⅡ-1』（2003年）、『王国と栄光：オイコノミアと統治の神学的系譜のために—ホモサケルⅡ-2』（2005年）を発表している。以下では、これら諸作品の内容に触れ、「ホモサケル」シリーズにおける『言語の秘蹟』の位置づけを確認しながらその意義を考えてみたい。

『ホモサケル』と『例外状態』で、アガンベンはミシェル・フーコーの生政治概念に靈感を受け、西洋における主権権力の性質について分析している。著者によれば、人間の生命が政治領域に組み入れられるという現象は古代の民主主義に比して、近代民主主義においていっそう顕著に見られる。なぜな

ら、著者が古代ギリシア・ローマの文献解釈を通じて明らかにしたように当時生命は聖なるものとはとらえられてはおらず、むしろそうなるのは近代民主主義が生命の解放として立ち現れて以降だからである〔Agamben 2010a: 13; アガンベン 2007a: 18〕。アガンベンは現代世界においてすべての市民は潜在的には聖なる者として存在していると述べる〔Agamben 2010a: 122; アガンベン 2007a: 157〕。古代においてホモサケルとはたとえ殺されたとしても、殺した人物は刑事上の罪を犯したことになる存在であった。かといってホモサケルは宗教的な犠牲に供されることもなかった。この前提の上で、主権とは元来、例外状態を宣言し法を停止することでだれがホモサケルであるかを決定する権力であった。これに対して、現代においてこの権力は例外状態から解放される傾向にあり〔Agamben 2010a: 157; アガンベン 2007a: 195〕、『アウシュビッツの残りもの』で論じられた収容所の場合のように、例外状態は規範として、もしくは常態としてたち現れる

*立教大学 AIIC 助教

[Agamben 2010a : 190 ; アガンベン 2007a : 232)。

以上の研究の後、『王国と栄光』においてアガンベンが政治神学とオイコノミア神学という二つの政治的パラダイムの系譜の再構成を始めた。両者は相矛盾するものの、機能において結合されており、いずれもがキリスト教神学を起源としている。政治神学からは政治哲学と主権の近代理論が、オイコノミア神学からは近代の生政治が生じ、これら二つのパラダイムは近代民主主義に引き継がれた。いわば、「世界は『権威 *auctoritas*』(つまり実際の実行なしの権力)と『権力 *potestas*』(つまり行使の権力)——王国と統治——という二つの原理の協調によって統治されている」

[Agamben 2009a : 118 ; アガンベン 2010 : 202]。注目したいのは、アガンベンが神について考察するとき、神の統治の正当性を保証するのは栄化であって、神の存在そのものではないとしている点である。続けて、「典礼的栄誦が神の栄光を生み出し力づけるように、世俗的な喝采は政治的権力の装飾物ではなく政治的権力を基礎付け、正当化するものである」[Agamben 2009a : 253 ; アガンベン 2010 : 433]と述べられ、メディアを媒介にした喝采は現代民主主義において政治的な装置の中核をなすと主張される。

『言語の秘蹟』はこの研究の延長線上にある。この作品では、『王国と栄光』で視野に入ってきた喝采の政治的意義が、ギリシア・ローマ時代の宣誓に関する史料の分析を通じて掘り下げられ、権力と言語の密接な関係が解明されている。19世紀から20世紀初頭にかけて発展した、宗教学や神話学における結論によれば、宣誓は人間精神の呪術的・宗教的領域から生じてきたものとされるが、このよう

な見解は覆され、呪術や宗教はむしろ宣誓から生じてくるとされる [Agamben 2009b : 59, 89]。

アガンベンによれば、人類の歴史、とくにヨーロッパの歴史においては常に神のもとの宣誓において言葉と物を一致させる努力がなされてきたという。かれは言語経験、すなわち^{スピーチ・アクト}言語行為としての宣誓、という側面を強調する。アガンベンは次のように問いかける。神という名前が、その指し示す内容からみれば空虚であるにもかかわらず、なぜこれほどまでの長きにわたり宣誓という実践が繰り返されてきたのか、と。かれによれば、重要なことは神の意味内容ではなく、神の名を発するというその行為そのものである。このパフォーマンスの瞬間、言葉の意味付与作用は一時停止されると同時に、神の存在はその言葉、すなわち神という名への信頼によって保証されている [Agamben 2009b : 63, 73, 76]。ただただこのような形而上学もしくはパフォーマンスにおいてのみ神は存在し、それがゆえに言語が神の存在を保証することにもなるのである。

それでは、言葉と物が一致しないと何が起こるのであろうか。宣誓は呪詛の言葉へと変貌する。宣誓したことを守る者は信頼と権力を維持し、反対に、裏切り者あるいは言葉と物の結合を断ち切る者は極端な場合、^{ホモサケル}聖なる者、すなわち人間世界の外の存在となる [Agamben 2009b : 35-36, 40-41]。ここで、宣誓は権力の秘蹟として機能している。秘蹟とはもともと法の停止と剥き出しの生、つまりはホモサケルの創造を通じた権力を意味していた。つまりは、言語の秘蹟としての宣誓は法権力の基礎を構成するといえるのである [Agamben 2009b : 90, 96]。

こうしたアガンベンを理解は必ずしも科学的方法に立脚しているわけではないが、この分析を通じアガンベンはその持ち前の挑発的な文体で西欧政治思想史における重大な欠陥を補い、政治と宗教、さらには言語との結合関係について論じる。アガンベンの方法論は現代言語学をふまえており新しく見えるのだが、実際には長い伝統をもつ文献学と文芸批評という遺産の上に構築されている。ここにわれわれは第一の重要な意義にたどり着く。すなわち、アガンベンの立場は科学的な学問分野や図式から適切な距離をとることを可能にしており、政治権力と言語の親密な関係に迫ったかれの方法論を「科学的」ではないものとして捨て去るにはあまりにも惜しいということである。

さらに、アガンベンの諸作品は西欧民主主義の政治モデルに由来する人権や国民国家の形成だけでなく、民主主義の名の下に人間の生命を配慮する国家や諸団体の実践を批判的に再検討することを促す。これが現代世界の生政治的な状況への批判意識を内包するホモサケルの第二の意義である。アガンベンは従来しばしばなされたようにたんに国家に社会を対置しその再生を目指しているわけではない [Agamben 2001 : 67-69]。『到来する共同体』において宣言しているように、かれが想定しながらもいまだに実現していない共同体とは、あらゆる同一性（たとえば、ロシア人であるとか、フランス人であるとか、イスラム教徒であるとか）に無関心で、諸個人の唯一無二の特徴、「いかなるものであれ、その単独性」に敬意が払われる、そんな共同体である [Agamben 2001 : 52-61]。現実を回避し、仮想的な共同体に代えるための道徳的な力は、世界の不可逆的な世俗化を解明すること

によってのみ得ることができるとされる [Agamben 2001 : 85-87]。ここに、アガンベンが「ホモサケル」執筆を決意し、主権権力の性質とその系譜の解明にまで至った根本動機があるように思う。

〈参考文献〉

日本語

- 上村忠男 (2009) 「閩からの思考」 (2002年) 『現代イタリアの思想をよむ [増補新版] クリオの手鏡』所収, 平凡社ライブラリー, 336-47頁。
 —— (2009) 「アガンベン読解のための第三の扉」 (2007年) 『現代イタリアの思想をよむ [増補新版] クリオの手鏡』所収, 平凡社ライブラリー, 348-61頁。
 遠藤孝 (2010) 「『構成する権力』と『主権権力』——権力をめぐるネグリとアガンベンの論争」 中央大学法学会『法学新報』第117巻第1・2号, 99-127頁。
 岡田温司 (2008) 『イタリア現代思想への招待』講談社選書メチエ。
 金森修 (2010) 『〈生政治〉の哲学』ミネルヴァ書房。
 『現代思想：特集ジョルジョ・アガンベン—剥き出しの生』青土社, 2006年6月。

外国語

- Agamben, Giorgio (1996). *Mezzi senza fine*, Boringhieri, Torino (G. アガンベン『人権の彼方に：政治哲学ノート』(高桑和巳訳) 以文社, 2000年)。
 —— (2001). *La comunità che viene*, Boringhieri, Torino (1 ed., Einaudi, Torino 1990)。
 —— (2005). *La potenza del pensiero: Saggi e conferenze*, Neri Pozza, Vicenza (G. アガンベン『思考の潜勢力：論文と講演』(高桑和巳訳) 月曜社, 2009年)。
 —— (2007). *Quel che resta di Auschwitz: l'archivio e il testimone: Homo sacer III*, Boringhieri, Torino (1 ed., 1998) (G. アガンベン『アウシュビッツの残りもの：アルシーヴと証人』(上村忠男・廣石正和訳) 月曜社, 2001年)。

- (2009a). *Il regno e la Gloria. Per una genealogia teologica dell'economia e del governo: Homo sacer II, 2.*, Boringhieri, Torino (1 ed., Neri Pozza, Vicenza 2005) (G. アガンベン『王国と栄光：オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』(高桑和巳訳) 青土社, 2010年).
- (2009b). *Il sacramento del linguaggio. Archeologia del giuramento: Homo sacer II, 3.*, 2 ed., Laterza, Roma-Bari (1 ed., 2008).
- (2010a). *Homo sacer. Il potere sovrano e la nuda vita*, Einaui, Torino (1 ed., 1995) (G. アガンベン『ホモサケル：主権権力と剥き出しの生』(高桑和巳訳) 以文社, 2007年 (2003年)).
- (2010b). *Stato di eccezione: Homo sacer, II, 1.*, Boringhieri, Torino (1 ed., 2003) (G. アガンベン『例外状態』(上村忠男・中村勝己訳) 未来社, 2007年).
- Geulen, Eva (2009). Giorgio Agamben *sur Einführung*, Junius, Hamburg (1 ed., 2005) (E. ゴイレン『アガンベン入門』(岩崎稔・大澤俊朗訳) 岩波書店, 2010年).